

女子部が行く！

学会探訪記

最終回 Info-WorkPlace 委員会

—ダイバーシティについて考える—



レポーター 五十嵐悠紀 (明治大学)

2016 年度に産声をあげた新しい委員会

「女子部が行く！学会探訪記」シリーズ最終回である今回は、本会におけるダイバーシティ推進の取り組みとして、2016年4月に新たに発足した Info-WorkPlace 委員会へ潜入した。この委員会は女子学生、女性技術者・研究者の活動を支援し、本会の一層の発展を図ることを目的に設立された。委員たちのこだわりとして、『性別・年齢を問わず、私たちのワークプレイスを新たにデザインしていくことを目指したい』として「女性」や「男女共同参画」といったネーミングを避けたようだ。また、本会らしく、ICTを積極的に活用していくことを意識し、Informationのニュアンスを追加した「Info-」を付け、最終的にこの名称となった。

委員会の進め方

委員会は13時ちょうどに開始(図-1)。前回議事録の確認のあと、マイルストーン確認が行われた。マイルストーンとは、物事の進捗を管理するために途中で設ける節目を指す。4月に発足し、ちょうど半年経過したこ



図-1 会議の様子。当日飛行機が飛ばず函館から来られなかった木塚委員長が Skype 越しに議題を進めていく

の時点で今年度の動きを振り返った。

その後、委員会のミッション確認を KPT 法で記載された資料を基に行っていた(図-2)。KPT 法とは、Keep, Problem, Try の略であり、振り返りのためのフォーマットの1つである。振り返りで、続けたいこと(K)、問題と感じたこと(P)、次の期間で改善に取り組むこと(T)を具体的に挙げることで、課題を整理し、実践に導くために使われる。

「女性会員を増やす」「女性会員のネットワークを構築する」「委員会の運営関係」など具体的な案件に対して、KPT法で整理された資料はとても分かりやすい。

「何月にやるか、どのようにやるか、というのを決めていなかったものが結局行っていない」と具体的に期日を決めることの大事さを改めて認識したり、「女性の会員を増やす」ということについては、これまで特に勧誘していなかったため、各イベントで10人ずつくらい増やしていき、挽回したいと思っている、とのことであった。

委員会の運営自体は紙媒体の資料のほか、Trello を使ってタスク管理をしている。誰にタスクがあるのか分かりやすくなったというメリットがある一方で、「タスク配分がうまくいっておらず、あきらめた TODO もあります。委員のみさんの得意分野が分かるだけで、タスクを振りやすくなります。普段書く作業をやっているので記事ならすぐ書けるよ、とか声を上げてほしい」と話す木塚委員長。

そこで、木塚委員長が直近のイベントの記事執筆をしてくださる方を募ると「そのイベントの記事執筆は木塚先生がご自身でアサインしているように見えるんですが……」と委員から声が上がった。すると、「それは仕方なく、私入れたんですけど、

振り返りまとめ

K (Keep) , P (Problem) , T (Try)

委員会のミッション関連：
1. 女性会員数を増やす

- | | |
|---|--|
| K | <ul style="list-style-type: none"> 試行錯誤はしている（活動の最適解へ近づいている） 活動が女性会員数を増やすのに貢献していないのでは...? |
| P | <ul style="list-style-type: none"> ジュニア会員（小中高・高専生、大学学部1～3年生）
https://www.ipsj.or.jp/member/junior.html
の申込書をイベントに持って行って署名してもらうのを忘れた。
次回から用意してもらう。 |
| T | <ul style="list-style-type: none"> 冊子を活かしてきいていない。冊子にコミュニティへの参加のお誘いとコミュニティの活用方法の説明と、会員申込書をはさむべき。 ミッションを考えると女子校への出張授業はやるべき。 |

図-2 KPT法でまとめられた委員会資料

本当はキャパオーバーで（木塚委員長）という事実が発覚。やらなければいけないTODO、すでに着手できるもの、アサインがされておらず誰かやってほしいもの、というのが分かりにくいという現状の使い方の問題点がクリアになった。

「ここにあるものだったら、だれでも拾っていいよ、というレーンを作るだけで分かりやすいですね」といった声から、「誰か拾ってください」というタスクを作ることになった。

大事なのはコミュニティの構築

Info-WorkPlace 委員会では、コミュニティの構築として、女性 IT 技術者を支援するネットワーク（活動名称 COPINE: コピーヌ）^{☆1} を立ち上げ、Web サイトの運営を開始した。ここでは、各メンバの「見える化」を意識し、委員会の活動報告や、女性の活躍をサポートするイベントの紹介などさまざまなコンテンツを掲載している。登録メンバを増やすためにはどうしたらよいかなどについて話し合われた。

今現在行われている各企業でのコミュニティ構築に関する事例紹介や、ほかのコミュニティ構築に関する事例などが紹介され、参考にして意見が出された。COPINE でも、ゆくゆくはお悩み相談室のようなコンテンツを増やしたいとのことだった。「自然と質問が集まり、それに答える人も集まるような、そんなコンテンツができたらいいな」と。

☆1 COPINE : <http://info-wp.org/>

具体的なイベント企画

具体的なイベントの話し合いの風景を1つ紹介しよう。全国大会 2017 ではライフハック的な試みを紹介するといったイベントが企画されている。「このイベントに来る人とメッセージが合致しないよね」といったことから始まり、「そもそもイベントには誰でも入れるのか?」「中継することはできるのか?」「記事に残すのか?」「このままでは男性が来てくれないのではないか?」「女性感が出てしまっていないか?」とディスカッションは弾む。

「女性感というか、テクニックやノウハウを教える、というか、子育てと仕事の両立、家事の分担や介護、となると女性なのかな、と勝手に思ってしまった」という伊東委員の意見に皆で頭を捻る。「来る人はなんらかの IT の専門家。自分だったら、こういうところにこう解決できるよね、といった“自分事化”させてもらいたい、というのがこのイベントの趣旨です」という木塚委員長の言葉に納得する委員のみなさん。

「問題解決を楽しくする、ということテーマが広すぎるでしょうか?」「具体的に概要は書いたほうが想像しやすいかな、と思って書いたのですが、逆に想像しづらくなった面があると思っている。」「ライフハックという言葉がまだ浸透していない」「ライフハックとは何か? 事例をまず紹介します、という感じでしょうか」などと、意見が出ていたところにかさず、「私修正案作りますよ」と永瀬委員。この女性チームの流れるような連携に惚れ惚れした。

そのほか、来年度の事業計画や予算計画、次回の委員会は1月に開催と確認したところでちょうど15時で終了。時間ピッタリに始まり、予定時間ピッタリに終わる。これも大事な取り組みの1つなのかもしれない。

女性技術者が少ない2つの要因を支援したい!

最後に、木塚委員長へインタビューのお時間をとっていただいた。まずは、本委員会設立まで大変だったことについて聞いてみた。「もともと、IT ダイバーシ

ティフォーラムというグループがあり、そこから引き続きこの委員会が始まりました。私自身、女性支援といった活動は、少しは行っていましたがあまり詳しくはありませんでした。そこで、前例にとらわれず、どういう形がよいのかを一から考えたところが大変でした。今後はもっと委員の方の多様なバックグラウンドを活かした活動にしていきたいです」と木塚委員長。

女性会員を増やすことのメリットについてもお聞きすると、「女性が少ないと、やりやすいところもあるけれども、やりにくいところもある。なんとなく、本音は言わないようにしてちょっと我慢することが増えていってしまう。そういったことが性別を問わずいろんな会員が増えていくことで、声を上げやすくなるのではないのでしょうか。研究に関しても女性が行っている研究は視点が面白かったりもします。女性が増えるといういろいろな面ですごく活動しやすくなると思います」（木塚委員長）

Info-WorkPlace 委員会の今後の活動予定に、女子校への訪問もある。これは女性会員を増やすための策でもあるというが、「そもそも大学に入ってくる女性の人数が少ないため、それを突き詰めて考えていくと、高校の進路選択で選択肢として増えるようにしてあげることが大事なんです。私たちが高校生にじかに接する機会を増やしたい」と話してくださいました。

最後に「現状として、『女性技術者が少ない』という事実は、1) 入口が狭い、2) 離脱者が多い、の2つの要因が大きいので、その2つを変えていくために我々は支援していきたいと考えています」と締めくくっていただいた。

この記事を読んで少しでもこの活動を応援したいと思っただいた方は、まずは COPINE へアクセスしてみただけだと幸いです。

(2016年11月19日受付)

最終回にあたって

学会内のさまざまな組織取材し、その活動内容を報告することを目的に始まった「学会探訪記」シリーズ。情報規格調査会など、スケジュールの関係で取材が叶わなかった組織があるものの、当初予定していた主だった委員会への取材が終了し、今回無事に最終回を迎えることになった(表-1)。2015年8月号の連載開始から2年弱が過ぎ、世の中も本会も変わってきて

いることを考えると、2巡目はまた違った内容をレポートできそうではあるのだが、ちょうど一区切りついたところでいったん終了することにした。この間、レポーターを務めてくれた会誌編集委員会女子部のメンバーはもちろんのこと、取材にご協力いただいた多くの皆さまに感謝したい。委員会への同席だけでなく、活動内容に関するインタビュー、写真撮影など、さまざまな形で多大なるご協力いただいた。

第1回の記事にも書いたのだが、学会の運営は、熱い思いを持った多くのボランティアによって支えられている。本誌には、理事会報告のようなページは存在せず(学会 Web ページ上にはありますが)、これらの活動をどうやって読者の皆さんに伝えていけばよいか、と考えていた。本シリーズが、学会活動について改めて考えてみるきっかけになればうれしく思う。

(加藤由花(東京女子大学) / 女子部が行く! エディタ)

掲載号	委員会
2015年8月号	会誌編集委員会
2015年9月号	理事会
2015年10月号	定時総会
2015年12月号	デジタルプラクティス編集委員会
2016年1月号	調査研究運営委員会
2016年4月号	新世代企画委員会
2016年7月号	事務局
2016年8月号	情報処理教育委員会
2016年10月号	論文誌ジャーナル編集委員会
2016年11月号	事業運営委員会
2017年4月号	セミナー推進委員会
2017年5月号	Info-WorkPlace 委員会

表-1 これまでの取材先一覧